文化・教育委員会　委員長メッセージ

オリンピック競技大会の理念をあらわす『オリンピック憲章』の冒頭に記されている「オリンピズムの根本原則」のなかに「オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。オリンピズムはスポーツを文化、 教育と融合させ、 生き方の創造を探求するものである。 その生き方は努力する喜び、良い模範であることの教育的価値、 社会的な責任、さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とする。」という一節がある。

この基本的な理念を具体化するために東京 2020 組織委員会は 2015 年から文化・教育プログラムの検討を開始し、あわせて文化や教育の有識者をメンバーとする文化・教育委員会を設置した。委員会は文化・教育プログラムのあり方とさまざまな企画のモデルなどを検討し提案してきた。それぞれの分野で先頭を走る委員の顔ぶれはまさに多士済々で、発せられる意見の一つ一つが説得力と魅力に富んでいた。その多様かつ広範な提案を実施可能な範囲と時間的制限の中に落とし込むため委員全員で知恵を絞ったことも貴重な体験であった。委員会が掲げた「一人でも多くの方々に参画いただき、大会をきっかけとした参画の成果を未来につなげよう」という「アクション＆レガシープラン」は国の津々浦々にまで発信されたのではないかと考える。

しかし、アントニオ・グテーレス国連事務総長が「第二次世界大戦以来、最大の試練」と指摘した Covid-19 はまさにパンデミックと化して、現在もなお多くの国々がその対応に明け暮れている。パンデミック禍のなかにあって、この試練を人類は克服していかねばならないという国際社会が共有する課題のもと、新たな生き方の創造を探求するという、まさにオリンピックが掲げる理念の実現に文化・教育委員会は取り組むことになった。したがって、感染の拡大や拡散の防止対策を施した上での文化・教育プログラムの実施には多くの困難が伴い、やむを得ず中止になったプログラムもあったものの、関係者の熱意と努力によって当初の目的を成し遂げることができたのではないかと文化・教育委員会は考えているが、その評価はより多くの方々の判断と 10 年後、20 年後の歴史的判断に委ねるしかない。

文化・教育委員会委員長

青柳　正規

数字で見る東京 2020 大会のアクション例（文化・教育）

東京 2020 文化オリンピアード

約 3,700 万人

東京 2020 文化オリンピアードの
参加者数

主催プログラム

300 万人以上

東京 2020 NIPPON フェスティバル「しあわせはこぶ旅 モッコが復興を歩む東北から TOKYO へ」「わっさい」「MAZEKOZE アイランドツアー」のオンラインライブ配信視聴者総数

共催プログラム

約 11 万人

東京 2020 NIPPON フェスティバルの
共催プログラムの参加者数
（オンラインライブ配信視聴者含む）

オリンピック・パラリンピック教育

19,005 校

よういい、ドン！スクール認証学校数
教育プログラム特設サイトも
総アクセス数約 152 万回の利用

学校連携観戦

約 2 万人

学校連携観戦チケットによる
児童・生徒等数
（当初計画は 128 万人）

東京 2020 マスコット小学生投票

205,755 学級

対象校の約 8 割の学校が参加

第五章　文化・教育

1.　基本的な考え方

- 文化は、スポーツと同じく、人々に感動を与え、豊かな人間性を涵養し、想像力と感性を育むなど、人間が人間らしく生きるための糧となるものです。
- 教育も、豊かな人間性を涵養し、人格の完成を目指し、ひいては社会の形成者を育成していくことを目的とするものであり、スポーツもその重要な一角をなすものです。
- これらは正に、オリンピック・パラリンピックの精神に通じるものであり、オリンピック憲章においても、文化・教育の重要性について、以下のように謳われています。

  「オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するものである。その生き方は努力する喜び、良い模範であることの教育的価値、社会的な責任、さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とする。」
- 文化や教育の各種取組は、全国どこにいても、誰もがオリンピック・パラリンピックに参加することを可能にするものです。
- 文化・教育は、より多くの人々をオリンピック・パラリンピックに巻き込んでいくこと、全国各地で、オリンピック・パラリンピックの成功に向けた機運を醸成していくことにおいて大きな役割を果たしました。

2.　文化

（1）　レガシーコンセプト

- 基本的な考え方を踏まえ、文化の分野では、以下の通り、4 つのレガシーコンセプトを設定し、様々な主体における多様な取組によって東京 2020 文化オリンピアードを全国で展開しました。

  コンセプト①：日本文化の再認識と継承・発展

  コンセプト②：次世代育成と新たな文化芸術の創造

  コンセプト③：日本文化の世界への発信と国際交流

  コンセプト④：全国展開によるあらゆる人の参加・交流と地域の活性化

（2）　アクション

- 世界規模での新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、各団体が 2020 年に向けて準備していた多くのプログラムが延期や中止を余儀なくされました。このような状況にあっても、文化芸術に携わる全ての人が試練を克服すべく、芸術活動の再開、継続に向け、新たな創造を探求しました。

1）　東京 2020 組織委員会によるアクション

- 文化オリンピアードの全国各地での展開を目指して、キックオフや 1,000 日前な

ど節目となる機会に、文化オリンピアードのムーブメントを喚起する事業を実施しました。

- 世界の注目が日本・東京に集まる 2021 年 4 月から 9 月にかけて、あらゆる境界を超えた連帯の象徴となるよう、公式文化プログラムとして、東京 2020 NIPPON フェスティバルを実施しました。

① キックオフプログラム「幕開き 日本橋 ～東京 2020 文化オリンピアードキックオフ～」（2016 年 10 月実施）

東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、三井不動産株式会社と共催し、江戸文化の発信地であり、五街道の起点にもなった日本橋から、東京 2020 文化オリンピアードのキックオフを宣言し、全国津々浦々での参画を呼びかけました。

② 日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS 企画展「Museum of Together」（2017 年 10 月実施）

東京 2020 文化オリンピアードの普及啓発を行うと共に、アートを通じて多種多様な人々が参加・交流することを目指して、日本財団と共同で障がい者と共に楽しむアート展を実施しました。

③ 1000 日前イベント「文化オリンピアードナイト」（2017 年 11 月実施）

文化オリンピアードをテーマにしたトークセッションや被災地を「音楽で繋ぐ」コンサートを通じて、東京 2020 NIPPON フェスティバルに向けての期待感を高めました。

④ 東京 2020 公式アートポスター

20 世紀初頭から、各大会の組織委員会は、オリンピックというスポーツ・文化イベントへの認知と理解を促進するために、ポスターを制作してきました。また、オリンピックのポスターは、各大会の特色を世界に伝える役割も果たしています。

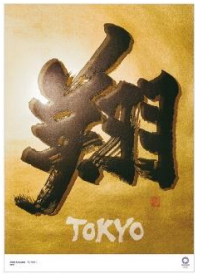
東京 2020 大会においては、絵画、グラフィックデザイン、写真のほか、日本が世界に誇る文化である漫画や書など広範なジャンルのアーティストが、オリンピックまたはパラリンピックをテーマに合計 20 作品の公式アートポスターを新たに制作しました。

○オリンピックをテーマとする作品

浦沢 直樹 Naoki Urasawa
あなたの出番です。
Now it's your turn!

大竹 伸朗 Shinro Ohtake
スペース・キッカー
Space Kicker

大原 大次郎 Daijiro Ohara
動線
flow line

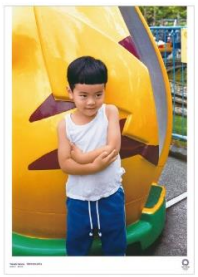


金澤 翔子 Shoko Kanazawa
翔
FLY HIGH!

鴻池 朋子 Tomoko Konoike
Wild Things - Hachilympic

佐藤 卓 Taku Satoh
五輪の雲
OLYMPIC CLOUD

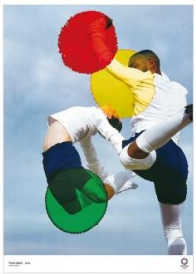
野老 朝雄 Asao Tokolo
HARMONIZED CHEQUERED EMBLEM STUDY FOR
TOKYO 2020 OLYMPIC GAMES [EVEN EDGED MATTERS
COULD FORM HARMONIZED CIRCLE WITH "RULE"]



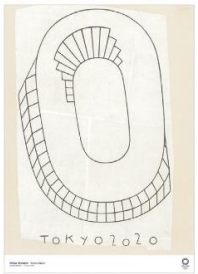
ホンマタカシ Takashi Homma
東京の子供
TOKYO CHILDREN

テセウス・チャン
Theseus Chan
EXTREME REVELATIONS

クリス・オフィリ
Chris Ofili
The Games People Play



ヴィヴィアン・サッセン
Viviane Sassen
Ludus



フィリップ・ワイズベッカー
Philippe Weisbecker
オリンピックスタジアム
Olympic Stadium

○パラリンピックをテーマとする作品

荒木 飛呂彦 Hirohiko Araki
神奈川沖浪裏上空
The Sky above The Great Wave off the Coast of Kanagawa

柿沼 康二 Koji Kakinuma
開
Open

GOO CHOKI PAR
パラリンピアン
PARALYMPIAN

新木 友行 Tomoyuki Shinki
オフェンス No.7
Offense No.7

野老 朝雄 Asao Tokolo
HARMONIZED CHEQUERED EMBLEM STUDY FOR TOKYO 2020 PARALYMPIC GAMES [EVEN EDGED MATTERS COULD FORM HARMONIZED CIRCLE WITH "RULE"]

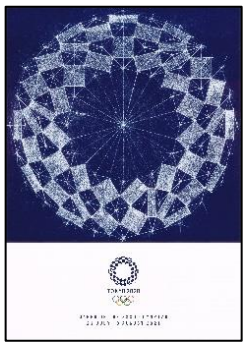
蜷川 実花 Mika Ninagawa
Higher than the Rainbow

森 千裕 Chihiro Mori
カーブの向う（五千輪）
Beyond the Curve (Five Thousand Rings)

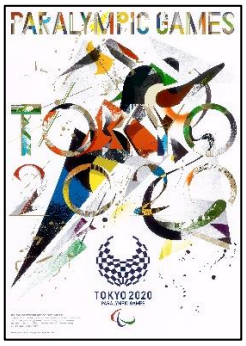
山口 晃 Akira Yamaguchi
馬からやラ射る
Horseback Archery

また、東京 2020 公式アートポスターの中から大会を象徴する「アイコニックポスター」が IOC 及び IPC 会長により選定され、オリンピックは野老朝雄氏の作品、パラリンピックは GOO CHOKI PAR の作品となりました。

○東京 2020 オリンピック
アイコニックポスター



○東京 2020 パラリンピック
アイコニックポスター



アイコニックポスターは、IOC 及び IPC が将来にわたって作品の権利を保有し、展示やライセンス商品展開等の活用を推進していく大会のレガシーの一つです。オリンピックと比較してパラリンピックの公式ポスターの歴史はまだ浅く、アイコニックポスターを選定したのは東京 2020 大会が初の試みとなりました。

2）　その他のステークホルダーによるアクション

① 東京都

- 東京都は、オリンピック・パラリンピックを契機に“芸術文化都市 東京”の魅力を世界に発信しようと、2016 年から様々な文化プログラムを展開してきました。
- 2017 年からは、東京都の文化プログラムを「Tokyo Tokyo FESTIVAL」と銘打ち、芸術文化の可能性にチャレンジする「文化の祭典」ならではのプログラムを始め、都立の美術館・博物館・ホールで行われる展覧会や公演、まちを舞台としたアートイベント、国内外の団体や企業などの文化活動支援、都内区市町村と連携して進める事業など数多く実施しました。
- このほか、コロナ禍で活動自粛を余儀なくされたアーティスト等の創作活動を支援するため、専用ホームページ等で発信する「アートにエールを！東京プロジェクト」を実施しました。

② 国

- 国は、2020 年以降を見据え、日本の強みである地域性・多様性に富んだ文化を活かし、成熟社会にふさわしい次世代に誇れるレガシーの創出に資する文化プログラムを「beyond2020 プログラム」として認証する取組を日本全国へ展開しました。
- 東京 2020 大会を契機として、総合テーマ「日本人と自然」の下に、縄文時代から現代まで続く「日本の美」を国内外へ発信し、次世代に伝えることで、更なる未来の創生を目指して、「日本博」を 2019 年から開始しました。日本博のプログラムは、文化庁、日本芸術文化振興会、関係府省庁、全国の文化施設、地方自治体、民間企業・団体等の総力を結集し、日本の美を体感する美術展・舞台芸術公演、芸術祭などを、年間を通じ、全国各地で展開しています。

（3）　主な実績・成果

- 文化オリンピアードは全ての都道府県で展開し、多くの人々が文化の祭典に参加しました。
  - ➢ 文化オリンピアードの会期中に実施されたプログラム数は 5,657 件、参加者数は延べ 37,129,108 人となりました。
  - ➢ イベントの主催者のうち 93.8%は、2020 年以降も同様の事業を実施したいと考えており、東京大会のレガシーが全国各地で継承されます。
  - ➢ また、イベントの 56.5%でボランティアが積極的に参加しました。ボランティア文化の醸成にも貢献しました。
  - ➢ 障がい者や外国人などの多様な人々が参加・活躍したイベントが 86.1%ありました。全国的にソフト・ハードのアクセシビリティの整備、インバウンドの拡大により国際性が進んでいることの証左となる結果でした。
- コロナ禍により、公演や展覧会が中止になるなど文化芸術への影響は深刻でしたが、オンラインを活かした表現や鑑賞方法などの新たな価値が創造されました。
  - ➢ 2020 年に文化芸術を直接鑑賞した人の割合は 41.8%で、前年度の 67.3%か

ら大幅に低下しました。

- ➢ 2020 年にインターネット有料配信等により文化芸術を鑑賞したことがある人は、全体では 27.7%、20～29 歳では 48.4%を占めました。

※　2021 年 3 月　文化庁「文化に関する世論調査報告書」

- 「日本博」や「beyond2020 プログラム」においては、全国から数多くの取組が採択、認証されています。
  - ➢ 「日本博」では、2021 年 8 月時点で累計約 910 件を採択、認証しています。
  - ➢ 「beyond2020 プログラム」では、全国 69 の認証組織が認証し、2021 年 8 月末時点で認証事業は累計 1 万 9000 件以上となっています。
- 選手村の食堂で日本の食文化の素晴らしさが発信されました。
  - ➢ 選手村のカジュアルダイニングでは、調達基準に基づき調達した全国 47 都道府県の食材を使って、米や野菜といった生鮮食材を活用したおにぎりやサラダといった日本食メニューを提供するとともに、大会史上初めて、食材の産地をリアルタイムで表示し、選手等に日本食文化の素晴らしさを発信しました。

（4）　レガシー

- 東京 2020 大会においては、文化オリンピアードを契機に、コロナ禍を乗り越えて様々な文化プログラムが展開された結果、幅広い層の文化活動への参画により、文化で全国を盛り上げる機運が上昇しました。
- 会場所在都市以外でも全国津々浦々で文化イベントが開催され、人々の交流を通じて、新たな表現や文化が創出されたと同時に、日本文化の再認識や世界への発信に繋げることができ、その継続・発展が期待されます。
- 国、東京都、東京 2020 組織委員会が一体となり取り組んだ結果、新しい事業はもちろん、既存事業を発展させたプログラムが様々な場所で創造されました。文化芸術団体や自治体等の新たなパートナーシップが全国各地でみられ、今後も新たな取組が見込まれます。
- 各地域が誇る歴史、文化財、伝統芸能、祭り等の文化資源を様々な枠組みの中で体系的に展開することにより、日本文化を再認識する機会と場を提供することができました。今後は、このことを契機に、日本文化が次世代に継承され、発展に繋がっていくことが期待されます。
- また、文化オリンピアードで創出されたプログラムの半数以上が 2021 年以降も継続予定であり、各地域の文化資源が次世代へも継承されることが見込まれます。

（5）　事例紹介

＜「東京 2020 文化オリンピアード」のキックオフプログラム開催＞

- 東京 2020 大会の開催に向け、4 年間にわたる「東京 2020 文化オリンピアード」のキックオフプログラムとして、2016 年 10 月に「幕開き 日本橋

～東京 2020 文化オリンピアードキックオフ～」を東京・日本橋福徳の森特設ステージにおいて開催しました。

- セレモニーでは、東京 2020 文化オリンピアードのキックオフが宣言され、特設ステージではキックオフを記念して、伝統と革新をテーマにしたパフォーマンスが行われました。
- 来場者も 4 年後から始まる東京 2020 大会に向けて実施される文化オリンピアードに期待が高まるイベントとなりました。

＜「東京 2020 参画プログラム 文化オリンピアードナイト」開催＞

- オリンピックの 1,000 日前イベントとして、2017 年 11 月に東京駅前行幸通りにて文化オリンピアードナイトを開催しました。
- 本イベントの第一部では、「日本文化をどのように発信していくか」などをテーマにトークセッションが繰り広げられ、その後、第二部の「Tokyo 2020 ALL JAPAN CONCERT」では、ライトアップされた東京駅をバックに様々なアーティストが歌やダンスを披露しました。
- 平和の祭典を待ち望む歌声が東京の夜空に響くと同時に、東京 2020 大会直前から実施される東京 2020 NIPPON フェスティバルに向け、オールジャパンで「日本の魅力」を世界に発信し、文化オリンピアードを盛り上げるための一夜限りの特別なイベントとなりました。

<東アジア文化都市 2019 豊島>

- 「東アジア文化都市 2019 豊島」では、「舞台芸術」「マンガ・アニメ」「祭事・芸能」を中心にオールとしまで事業展開しました。また、中国・西安市、韓国・仁川広域市とともに様々な文化芸術交流イベントを実施し、相互理解と絆を深めることができました。
- 「マンガ・アニメの聖地」「国際アート・カルチャー都市」としての豊島区の魅力を国内外に向けて大きく発信しました。

<「さいたま国際芸術祭 2020」>

- さいたま国際芸術祭 2020 は、プロのアーティストによる最先端の作品を紹介するだけでなく、それらと市内各地において古くから培われてきた文化や様々な市民による文化芸術活動が出会う場をつくり、それらが融合・触発しあうきっかけを創出することで、文化芸術都市としてのさいたま市を創造することを目的に、2020 年 10 月から 11 月にかけて開催されました。
- さいたま市また日本が誇る「盆栽・人形・鉄道・漫画」文化について、本芸術祭ならではの現代アートの切り口で解釈し国内外へ発信するとともに、コロナ禍においても、外国人のアーティストの作品を発表し、アートを通じての国際交流に貢献しました。

フランク・ブラジガンド、≪日常の修復-旧大宮区役所≫
撮影：丸尾隆一

アウトリーチプログラム
Dama Dam Tal＋埼玉栄高校ダンス部
撮影：shunya Asami

＜「ジャパン×ナントプロジェクト」＞

- 文化庁が主催する障がい者の文化芸術国際交流事業、「ジャパン×ナントプロジェクト」が、東京 2020 組織委員会の公認文化プログラムとして 2017 年 8 月より開催されました。
- 本事業は、「フランス国立現代芸術センター“リュー・ユニック”」、「ナント国際会議センター“シテ・デ・コングレ”」の両館ディレクターが評価した、アール・ブリュット作品や障がい者による優れた舞台芸術（伝統芸能［和太鼓、神楽］、ダンス、音楽、演劇）を発表しました。
- 会期中は、障がいのある方の造形活動や日々のくらしを収めたドキュメンタリー映画が上映されるなど、多種多様な文化を海外に発信する先進的な取組が図られ、日本文化の新たな側面を示すとともに、文化芸術立国として世界に存在感を示す絶好の機会となりました。

＜「東京キャラバン」＞

- 東京都が主催した「東京キャラバン」では、劇作家・演出家・役者の野田秀樹氏総監修のもと、言語や国境、表現ジャンルを超えた多種多様なアーティストの“文化混流”が実現しました。
- 2015 年の東京・駒沢に始まり、リオデジャネイロ、東北（仙台・相馬）、六本木、京都（二条城、亀岡）、八王子、熊本、豊田、高知、秋田、いわき、埼玉、富山、岡山、北海道でそれぞれのジャンルを超えたパフォーマンスを展開し、「東京キャラバン」でしか見ることのできない新しい表現を創出し続け、文化ムーブメントを全国で巻き起こしました。
- 国や地域を超えた交流を継続的に図ってきたことで、東京 2020 大会以降の文化的な基盤を創生しました。

東京キャラバン in 京都・二条城(2017 年) 撮影：井上嘉和

東京キャラバン in 北海道(2019/2020) 撮影：篠山紀信

＜「ジャポニスム 2018」、「Japan 2019」及び「日本博」並びに「beyond2020 プログラム」を実施 ＞

- 「『日本の美』総合プロジェクト懇談会」で芽吹いた世界に誇れるソフトパワーたる日本の文化芸術の魅力を世界に広めていく日本博構想に基づき、「ジャポニスム 2018」、「Japan 2019」及び「日本博」を実施しました。
- 「ジャポニスム 2018」は、2018 年 7 月から 2019 年 2 月までパリを中心としたフランス各地にて、国際交流基金を事務局として実施され、日本文化の原点とも言うべき縄文文化から琳派、伊藤若冲、歌舞伎、メディア・アート、アニメ、マンガ、映画、現代演劇、食や祭りに至る、300 件以上の企画を通じて日本の芸術と文化の多様性に富んだ魅力を紹介し、総計 350 万人強の来場者を集めました。
- 米国では、国際交流基金が「Japan 2019」を 2019 年 3 月から 12 月までニューヨークとワシントン D.C.を中心に開催し、『源氏物語』をテーマとした展覧会、日本美術に見る動物表現を取り上げた展覧会、ギリシャ悲劇をもとにした日本の現代演劇、現代美術作家の演出による人形浄瑠璃公演等を、米国の美術館や劇場と連携しつつ実施し、その質の高さが、米国はもとより、世界から評価されました。最終的に総計 129 万人が来場し、米国における我が国の芸術や文化に関する理解・関心の裾野拡大にも貢献しました。

ジャポニスム 2018 公式企画
「チームラボ：境界のない世界」展
© teamLab

Japan 2019 公式企画『源氏物語』展 in New York
～紫式部、千年のときめき～
土佐光起筆《紫式部》（部分）石山寺蔵
Photo: Kanai Morio

- 「日本博」では、「日本の美」を体現する文化プロジェクトを全国各地で年間通じて体系的に展開し、2021 年 8 月時点で累計約 910 件を採択、認証しています。
- 新型コロナウイルス感染症について万全の対策を講じた実際の会場での「リアル体験」と、デジタルコンテンツによる仮想空間での鑑賞等を可能にする「バーチャル体験」の融合、SNS 等を活用した戦略的な発信手法の構築にも取り組み、「日本の美」を国内外へ発信してきました。
- 「beyond2020 プログラム」は、日本文化の魅力を発信する事業・活動であって、「多様性（バリアフリー）」又は「国際性（多言語化等）」に配慮した取組を全国 69 の認証組織が認証し、2021 年 8 月末時点で認証事業は累計 1 万 9,000 件以上となっています。

＜「文化の WA（和・環・輪）プロジェクト～知り合うアジア～」を実施＞

- ASEAN 諸国を始めとするアジア諸国・地域を対象に、「日本語教育支援」「芸術文化の双方向の交流」を核とする事業を、国際交流基金アジアセンターが 2014 年度より実施しています。
- 各国・地域の高校等に日本語教育を支援する「日本語パートナーズ」を派遣し、外国人日本語教師の授業のサポート等を行った結果、生徒の日本語力や学習意欲の向上、日本語を学ぶ生徒数の増加といった成果だけでなく、日本と現地の学校の間の交流機会の創出にも繋がり、日本語教育を継続的に行っていく上で好ましい環境を作ることができました。
- 双方向性と協働性を重視し、美術、映画・映像、舞台芸術、スポーツ、市民交流、知的交流など、さまざまな分野でアジアの人々との交流活動を実施した結果、各分野の専門家のネットワークや市民団体の連携が強化され、日本とアジア諸国・地域が双方の文化への理解を深め、協働して文化交流活動を行っていく機運の醸成や環境作りに貢献しています。

アジア各地の高校等で日本語授業のアシスタントや日本文化の紹介を行う日本語パートナーズ

写真提供：国際交流基金

U18 東南アジア選抜チーム「ASIAN ELEVEN」 vs. U18 東北選抜 サッカー国際親善試合「JapaFunCup」

©JFA

＜全国文化プログラムプレスセンター・プロジェクト＞

- 東京 2020 文化オリンピアードをはじめ、全国各地でコミュニティの文化・歴史をテーマにした祭りやイベント、文化財等を対象に、地元の中学生・高校生らがジャーナリストとして取材を行い、地域文化を発掘・再発見しながら手作りの新聞、ルポ、動画ニュースを作成することで地域文化の魅力を発信しました。

2018 年 7 月 2 日（月）東京 2020NIPPON フェスティバル取材会の様子

3.　東京 2020 NIPPON フェスティバル

（1）　基本的な考え方

- オリンピック憲章で、大会組織委員会は文化プログラムを実施することが義務付けられています。オリンピックがスポーツの祭典であると同時に、文化の祭典でもあると言われる所以です。
- 2020 年の東京大会に向けて、全国津々浦々にオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを広げるため、東京 2020 大会では、リオ大会以降、国、地方自治体、文化芸術団体、パートナー企業など、様々なステークホルダーと連携して、文化オリンピアードを全国で展開してきました。
- その集大成として、東京 2020 大会公式文化プログラムである東京 2020 NIPPON フェスティバルを実施しました。

（2）　東京 2020 大会延期から東京 2020 NIPPON フェスティバル中止に至る経過

- 2020 年 3 月 24 日の東京 2020 大会の開催延期決定に伴い、同年 4 月 20 日に東京 2020 NIPPON フェスティバルの 2020 年中の開催を中止することを決定しました。
- 以降、東京 2020 大会における文化プログラム実施の意義を改めて考えるとともに、新型コロナウイルス対策及び「大会延期に伴う大会の位置づけ、原則、ロードマップ」（2020 年 6 月 10 日公表）も踏まえ、フェスティバルの実施可否を様々な視点からゼロベース（廃止も含む）で検討した結果、2021 年 3 月 9 日に 2021 年の実施について決定しました。

（3）　2021 年における東京 2020 NIPPON フェスティバル実施の意義

- オリンピック憲章におけるオリンピズムの根本原則に立ち返ると、「オリンピズムとはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求することで、平和な社会の推進を目指すもの」であり、これが、オリンピック・パラリンピックがスポーツの祭典であると同時に、平和の祭典と言われる所以です。
- 一方、文化芸術活動は、人々に感動を与えるものであり、その感動はあらゆる境界を超えます。新型コロナウイルスが生じさせた社会の分断に対しては、文化芸術活動が境界を超えた連帯の象徴となりえます。
- 文化プログラムは、「平和な社会の推進」「人類の連帯の象徴」として、オリンピック・パラリンピックに必要不可欠なものであり、相互理解を進めグローバルな連帯や協力を促していく力があります。
- 東京 2020 組織委員会は、リオ大会以降、日本全国で展開してきた文化プログラムの集大成として、新型コロナウイルスによる社会の分断を乗り越えて、人々を感動で繋ぎ、連帯する象徴的な取組として、世界の注目が日本・東京に集まる 2021 年 4 月から 9 月にかけて、東京 2020 NIPPON フェスティバルを開催しました。

（4）　「文化の祭典」でもあるオリンピック・パラリンピック

1）　目的

① スポーツと共に、あらゆる境界を超えた連帯の象徴となり、平和な社会の実現に貢献すること

② 日本の誇る文化・芸術を国内外に強く発信すること

③ 共生社会の実現を目指して、多様な人々の参加や交流を生み出すこと

④ 文化・芸術活動を通して、多くの人々が東京 2020 大会へ参加できる機会をつくり、大会に向け期待感を高めること

2）　事業体系

① 主催プログラムについて

主催事業として、東京 2020 NIPPON フェスティバルの中核を成す 3 つの文化プログラムを実施します。これらのプログラムは、東京 2020 大会のビジョンやフェスティバルコンセプトを体現することで、フェスティバル全体を牽引する役割を担っています。大会と連動しながら、新しい文化プログラムの形を示すことで、大会への期待感とオリンピック・ムーブメントの醸成を図るとともに、大会後の未来にレガシーを遺すことを目的としています。

② 共催プログラムについて

東京 2020 NIPPON フェスティバルでは、東京 2020 組織委員会が主催するプログラムに加え、全国の自治体や文化芸術団体等と連携して実施する「共催プログラム」を行います。共催プログラムは、東京 2020 大会を契機に実施される日本を代表する特別な文化プログラムを、大会公式文化プログラムである NIPPON フェスティバルとして実施することで、日本が誇る文化・芸術を国内外に強く発信することを目指しました。

3）　コンセプト

東京 2020 NIPPON フェスティバル コンセプト

東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向けて、
全国でくり広げられる文化の祭典、それが東京 2020 NIPPON フェスティバルです。
日本にあらゆる国の人が集う本大会に先駆けて、
様々な人と文化が交流する場となるはずです。
地方と都市。日本と世界。
あらゆる境界を超え、ひとつになるその時。
きっと、かつてない文化が生まれるでしょう。
きっと、多様性の力と素晴らしさを実感するでしょう。
きっと、新たな文化と感動が未来につながってゆくでしょう。
その主役は、私たちひとりひとり。
そして舞台は、この国のあらゆるまちとまち。
日本各地の熱気と多様性の融合から、すべては始まります。
東京 2020 NIPPON フェスティバル。それは、
この国の新たな可能性を開くフェスティバルです。

東京2020 NIPPON フェスティバル

■東京 2020 大会エンブレムの制作者でもある野老朝雄氏が制作しました。

■フェスティバルの象徴となって、全国へ拡がっていくイメージが表現されています。

■大会エンブレムと同じ 3 種類の四角形を、同じ数組み合わせたマークが描くのは「Harmonized Checker ＝ 調和した市松」です。

■多様性の調和により、可能性や希望が拡がり、東京 2020 NIPPON フェスティバルがイノベーティブでアクティブな新しい輝きを起こしていくという思いをデザインに込めています。

4）　キャッチフレーズ

Blooming of Culture 文化は、出会いから花開く。

様々な人と人の出会いから生み出される“新たな文化と感動”を、フェスティバルらしい華やかな言葉で祝祭とともに表現しました。四季を楽しむ日本ならではのキャッチフレーズにより、日本中でフェスティバルとともに文化が花開くという願いを込めました。

（5） 主催プログラム

1） しあわせはこぶ旅 モッコが復興を歩む東北から TOKYO へ Presented by ENEOS

① 事業目的

- 「復興オリンピック・パラリンピック」を象徴する事業の一つとして、東北の地元の人々とともに大会公式の文化プログラムを創り上げること
- 東日本大震災からの復興を歩む「今」と、その力の源となった伝統文化をはじめとする多様な東北文化を、国内外に発信し、東北に新たなレガシーを残すこと
- 新型コロナ感染症に苦しむ人、戦う人々へ勇気と希望のメッセージを届けること

② 事業概要

2021 年 5 月から 7 月にかけて、「東北復興」をテーマに、クリエイティブディレクター箭内道彦氏の下、被災地の県・市と連携し、東北各地及び東京を舞台とした文化プログラムを実施しました。イベントに向けては、東北の子供たちとのワークショップを通して人形をデザインし、制作ボランティア等の協力を受けた長野県高森町で、人力で動く高さ 10 メートルを超える巨大人形「モッコ」を制作しました。

東北各県でのイベントは、岩手県からスタートしました。会場である高田松原津波復興祈念公園（陸前高田市）に約 600 人の参加者を迎え、モッコのパフォーマンスや東北の伝統文化・芸能とともに、多くの驚きと感動を伝えました。参加者へのアンケートにおいても、多くの人々から、「東北各地域の文化の発信ができたイベントだった」（そう思う：35%、ややそう思う：46%）、「東北復興のために貢献しているイベントだった」（そう思う：32%、ややそう思う：40%）という評価があり、復興オリンピック・パラリンピックに大きく貢献することができました。また、併せて海外メディアツアー（4 社参加）を実施し、東北文化や復興の状況等が海外へ発信されました。

宮城会場・福島会場については、各地の新型コロナウイルス感染状況を踏まえ無観客での開催としましたが、地元関係者やメディア向けにモッコのパフォーマンスを披露するとともに、地元自治体の協力を得て、多くの方々からメッセージを預りました。

東京でのフィナーレでは、「モッコ」が新宿御苑に到着し、東日本大震災以降、世界各国から寄せられた支援に関する感謝や力強く復興に向かいつつある姿、東北文化の魅力を、東北の人々の思いを乗せたオリジナル楽曲「とうほくの幸」とともに発信しました。宮城会場・福島会場と同様に無観客での実施となりましたが、東京 2020 公式 YouTube および東京 2020 公式 LINE でライブ配信を行い、約 102 万人が視聴しました。また、多くのメディア（国内：20 社、海外 11 社）がイベントを取材し、国内外にイベントの様子や、東北復興に向けた人々の思い等が発信されました。

イベント後には、当日の様子や「とうほくの幸」を収録した PR 映像を国内外に発信しました。

＜プログラムの日程等＞

2021 年 5 月 15 日：岩手県陸前高田市「高田松原津波復興祈念公園」

同年 5 月 22 日：宮城県岩沼市「千年希望の丘 相野釜公園」

同年 5 月 29 日：福島県南相馬市「雲雀ヶ原祭場地（相馬野馬追祭場地）」

同年 7 月 17 日：東京都「新宿御苑　風景式庭園」

『とうほくの幸』

ぞぼい ぞぼい　ずとずど ねでで　みゃんが みゃんが　べべべ　うぉぉ うぉぉ うぉぉ

[verse#1]

歩く 歩く 歩く モッコは歩く　のっし のっし 強く 優しく 明るく

道の奥の人々の 祈りと願いをのせて　一歩 一歩 少しづつ 一歩一歩

歩く 歩く 歩く モッコは歩く　のっし のっし のっし 足取りも軽く

世界中の人々の エールとラブを集めて　一歩 一歩 一歩 今日もまた一歩

ぞぼい ぞぼい　ずとずど ねでで　みゃんが みゃんが　べべべ　うぉぉ うぉぉ うぉぉ

[verse#2 / Iwate]

奇跡の松が立つ街に 10 回目の春が来る　生まれ変わった街並みに 生暖かい風が吹く

瞼の裏に 懐かしい景色 それぞれの歴史　されどこの場で生きていこう 「復興」の二文字に己重ねて

鳴り響く祭囃子 海に木霊し 鎮まる嵐　どんな困難にも立ち上がる 見とけ童（わらし）これぞ東北魂

未だ見ぬ日々に躍る気持ち あの日あの場所に残した気持ち

揺れる思いはそのままに 紡いでいこう次の物語 三陸

ぞぼい ぞぼい　ずとずど ねでで　みゃんが みゃんが　べべべ　うぉぉ うぉぉ うぉぉ

[verse#3 / Miyagi]

あの頃 4、5 歳 だった子供たちも 14、5 歳 中 3 になった 朧げなその記憶たどってたくさんの人々の支援を知った

ありがとう ありがとう 次は私たちが手差し伸べましょう　この恩を 別の誰かに 繋げて欲しい また別の誰かに

カタチの それは進めど ココロの それは未だに 忘れないで「東北よ、再び」はまだまだこれから 始まったばかり

救いはいつも 君の笑顔 宮城の明日をともに描こう　きっと片目の龍も街の発展 青葉の城から見守ってる

ぞぼい ぞぼい　ずとずど ねでで　みゃんが みゃんが　べべべ　うぉぉ うぉぉ うぉぉ

[verse#4 / Fukushima]

そして福島 浜通り ここで生きてる いつも通り 空は青く 光る緑 海からの恵みと大地の実り

今日この日を迎えられなかった 全ての人に 捧げる祈り　がんばっぺ がんばっぺ がんばっぺ 福島

よくがんばった がんばった がんばった がんばった東北

伝えて ここで起きたこと 伝えて ここのいいところ　伝えて 乗り越えたとこも 伝えて 遅れてるとこも

伝えて たくさんのうまいもん 伝えて あったかい人々　伝えて 福島の今を 伝えて 僕らの大切なもの

それはふるさと 見慣れたふるさと 前よりずっと大好きなふるさと

今はまだ 帰れない地区も 徐々になくなっていくだろう

その日 様々な色の花を集めて 鮮やかな花束を作ろうありふれた日々に感謝しながら それが東北の宝だから

ぞぼい ぞぼい　ずとずど ねでで　みゃんが みゃんが　べべべ　うぉぉ うぉぉ うぉぉ

[hook reprise]

歩く 歩く 歩く モッコは歩く　のっし のっし 強く 優しく 明るく

道の奥の人々の 祈りと願いをのせて　一歩 一歩 少しづつ 一歩一歩

歩く 歩く 歩く モッコは歩く　のっし のっし のっし 足取りも軽く

世界中の人々の エールとラブを集めて　一歩 一歩 一歩 今日もまた一歩

2）　わっさい

① 事業目的

新型コロナウイルスは、国の内外を問わず、少なからず「分断」を生みました。

家族、友達、国と国、地域と地域。こんな時代、時期だから、世界は繋がることが必要です。世界はもう一度、輪になれると願い、みんなで一緒に、オンラインで繋がり、踊りの輪を作る。そんなお祭りが「わっさい」です。

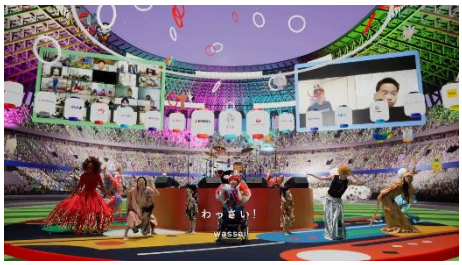
「わっさい」は、「僕たちの国が生まれる」ところから始まる、古事記の時代から現在の国立競技場までを旅する物語です。物語の中で世界中の人が、踊りや歌で参加して、輪になり、環をつくり、和を生む、お祭り。オンライン上の新しい祭りを通して、世界中の人々の参加と交流の実現を図りました。

② 事業概要

2021 年 7 月 18 日、オリンピック開幕直前期のプログラムとして、「参加と交流」をテーマに、総合演出の菅野こうめい氏の下、日本文化を通じて様々な人々が交流するオンラインイベントを、バーチャル空間上にオリンピックスタジアムを再現し実施しました。事前に全世界から投稿されたイラストがバーチャル空間上でアバターとなり、ステージパフォーマンスと共に参加者がみんなで踊ることを通じて、世界中の人々が「新しい祭り」を共に創り交流できるプログラムを目指しました。

第一部では、「わっさい」というお祭りが生まれるまでの物語を、ダンサーたちがステージパフォーマンスで表現しました。「ほのお」や「みず」、「かぜ」といったテーマのパフォーマンスで「わっさい」誕生の物語を伝えました。

第二部では、場所を現代のバーチャルオリンピックスタジアムに移し、ロックバンド WANIMA の演奏に合わせて、イラストや映像で参加してくれた人たち、LIVE 配信を見ている人たち、世界中の人たちと一緒に「わっさい」を踊り、ひとつの大きな「わ」をつくり、世界の心をひとつにしました。ライブ配信では、約 85 万人が視聴し、オリンピック開幕に向けた機運を高めました。



3）　ONE -Our New Episode- Presented by Japan Airlines

① 事業目的

共生社会の実現に向けて、多くの人々が本事業に参加し、障がいの有無、ジェンダー、国籍など、多様な個性を持つ人々が出会い、交流することで、その価値を感じ、気づき、多様性や共生社会に対する「共感・共鳴」に繋がり、そして、意識や行動に変化をもたらす「きっかけ」を創ることを目指しました。

② 事業概要

パラリンピック開幕直前期のプログロムとして、「共生社会の実現に向けて」をテーマにした２つの文化プログラムを通じて、世の中の「多様性」や「共生」に対する関心を最大化するとともに、オリンピックにおける熱狂や盛り上がりをパラリンピックへと繋いで、パラリンピック・ムーブメントを喚起しました。

＜MAZEKOZE アイランドツアー＞

まず、2021 年 8 月 22 日にオンラインライブ配信した「MAZEKOZE アイランドツアー」では、総合構成・演出・総指揮の東ちづる氏の下、エンターテインメントの力によって多様性や共生社会の魅力をユニークに表現した９つの個性的な島を旅することで、多様性のおもしろさや心地よさの体験を視聴者に提供し、約 116 万人が視聴しました。視聴者の多くが、多様性や共生社会に対する「共感」や「気づき」を得ることで、意識や行動の変化の「きっかけ」となった（きっかけになった：79%、ややきっかけになった 19%）とアンケートに回答しており、様々な人々が、それぞれが異なる特性を輝かせ、出会い、交流することで、その価値を感じ、気づき、共感･共鳴に繋がり、そして意識や行動に変化をもたらすきっかけを創り上げることができました。

＜Our Glorious Future ～KANAGAWA 2021～＞

次に、「ともに生きる社会かながわ」の実現を目指した取組を実施している神奈川県と共同主催で、「カガヤク　ミライ　ガ　ミエル　カナガワ　2021　Our Glorious Future ～KANAGAWA 2021～」を実施しました。当初は、日本を代表するモダニズム建築群である「紅葉ケ丘文化ゾーン」を会場とした実施を計画していましたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響等を踏まえ、オンラインでの映像配信に切り替えました。東京 2020 パラリンピック開会式ディレクター/チーフ振付家を務めた森山開次氏など、神奈川県にゆかりのあるアーティストによるディレクションのもとで、ダンス、演劇、アート、音楽、工芸などの多彩な文化芸術各分野について、2021 年 8 月 16 日から随時、22 本の映像作品を配信することで、「共生社会」の理念の浸透に寄与することができました。

（6） 共催プログラム

大会を象徴する特別な文化プログラムを国、地方自治体、文化芸術団体と東京2020 組織委員会が連携し、32 件のプログラムを計画しました。新型コロナウイルス感染拡大の影響等により 6 件を除いた 26 件のプログラムが実施され、多様な文化・芸術が発信されました。

1964 年の東京大会でも実施された能楽のプログラムから着想を得た能楽フェスティバルや、世界的な評価を受ける舞台芸術、障がい者をはじめとした多様な人々が主役となるプログラムなど、感染症対策を徹底しながら、競技会場都市を中心に、2021 年 4 月 1 日から 9 月 12 日までの間、全国で展開されました。

このほか、本フェスティバルの会期中には、文化関連イベントが全国各地で実施され、計約 11 万人（オンラインライブ配信の視聴者数を含む）が参加しました。これまでにない多彩で魅力的な文化プログラムも展開され、あらゆる人が芸術文化を享受できる社会基盤の構築に繋がり、地域の一体感の醸成、地域経済やコミュニティの活性化を促しました。

○　実施事業（26 プログラム）

① 群馬古墳・埴輪わくわく体験プロジェクト

- 実施主体：群馬県
- 事業概要：

群馬県立歴史博物館で特別展示「新・すばらしき群馬のはにわ」やワークショップ、講座等を開催するとともに、綿貫観音山古墳等での VR 体験やアプリを使った県内古墳等の周遊、古墳カードの配布などを実施しました。日本一の埴輪県であり、東日本最大の古墳大国である群馬県から、日本の古墳文化を国内外に発信しました。

② 「星降る中部高地の縄文世界～数千年を遡る黒曜石鉱山と縄文人に出会う旅～三十三番土偶札所巡り～山梨編～」

- 実施主体：甲信縄文文化発信・活性化協議会（山梨県）
- 事業概要：

日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」を構成する山梨県の 6 市に所在する博物館等 8 施設が展示する構成文化財の土偶 15 点が対象で、観覧者は対象土偶を見学し、専用の御朱印帳に土偶御朱印を集めました。

③ 「現代日本画の系譜 -タマビ DNA 展」

- 実施主体：多摩美術大学
- 事業概要：

日本画はこの国で 1000 年以上続く伝統的な絵画様式です。時代により変容しながらも今日まで受け継がれてきたのは、この様式が日本の風土や日本人の美意識、精神性に合っていたからといえます。本展覧会を通じて世界の人々に日本人の心のありように触れてもらい、日本画及び日本文化の魅力を世界に発信しました。

④ 信州・アート・リングス～文化でつながる。文化を創る。そして美しい未来へ～

- 実施主体：長野県、（一財）長野県文化振興事業団、長野県芸術文化協会、長野県教育委員会、信州ザワメキアート展 2021 実行委員会
- 事業概要：

  長野県芸術監督団の小林研一郎氏による音楽公演をはじめ、信州の自然を活かしたアーティスト・イン・レジデンス、信州ゆかりの作家による現代美術展や障がいのある方の美術展、県内各地の芸能を紹介する伝統芸能公演を多様な主体の参画のもとに実施し、信州文化の多彩な魅力を国内外に発信しました。

⑤ とちぎの「宝」フェスティバル　～とちぎ版文化プログラムの集大成～

- 実施主体：栃木県
- 事業概要：

  東京 2020 大会への参加機運の高揚に貢献するとともに、平成 29 年度から取り組んできた「とちぎ版文化プログラム」の集大成として、県立文化施設において、芸術、文化財、郷土芸能など、栃木県内各地の特色ある文化資源を活かした文化事業をリレー方式で展開することにより、とちぎの文化の魅力を県内外に発信しました。

⑥ ふじのくに野外芸術フェスタ 2021 静岡 宮城聰演出 SPAC 公演　『アンティゴネ』

- 実施主体：ふじのくに野外芸術フェスタ実行委員会
- 事業概要：

  国際的に活躍する SPAC-静岡県舞台芸術センターが、静岡市の中心地「駿府城公園」に野外舞台を設営し、芸術総監督宮城聰演出『アンティゴネ』を上演しました。

  同作は 2017 年フランス、2019 年ニューヨークで多くの観客を虜にしてきた SPAC の話題作です。

⑦ リボーン・アートボール 2020 展

- 実施主体：（主催）茨城県、（協力）筑波大学

- 事業概要：

  使い古したスポーツ競技用のボールに絵を描いたり工作をしたりして、アートの力で再生させる取組が「リボーン・アートボール」です。スポーツとアートとリサイクルを融合させた茨城発の取組です。

  県内 5 か所でワークショップを開催しました。

  なお、集大成としてリボーン・アートボールフェスティバルを開催予定でしたが、新型コロナウイルスの影響により中止となりました。

⑧ 伝承のたまてばこ～多摩伝統文化フェスティバル 2021～

- 実施主体：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、八王子市、公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団

- 事業概要：

  車人形、お囃子、農村歌舞伎、影絵など多摩地域の伝統文化が集結するとともに、能と髙尾山薬王院の僧侶による楽劇高尾山、染物で演出したダンスパフォーマンスをお届けしました。

  「伝承のたまてばこ」令和 3 年度のシンボルマークは、多摩地域で長く大切に紡がれてきた様々な伝統文化と革新が交差する様を表現しました。

⑨ 2020 インターナショナル小倉百人一首かるたフェスティバル

- 実施主体：（一社）全日本かるた協会、文京区、あわら市、大津市

- 事業概要：

  （一社）全日本かるた協会と、競技かるたに縁の深い地である文京区、あわら市、大津市の 4 者で、東京 2020 大会に向けて競技かるたイベントを開催しました。

  競技かるたの大会、競技かるたやバリアフリーかるた体験会、展示、講演会等、老若男女問わず様々な方に小倉百人一首や競技かるたの魅力を発信しました。

  文京区会場は、新型コロナウイルス感染拡大により中止となりました。あわら市会場は、無観客オンライン配信により実施しました。大津市会場は、有観客（人数制限あり）及びオンライン配信により実施しました。

⑩ あきた民謡祭 2021

- 実施主体：あきた民謡祭実行委員会
- 事業概要：

  秋田の代表的な伝統芸能である秋田民謡を次世代に継承していくことを目的に、若手の担い手による公演を実施しました。また、民謡を通じた地域活性化を促進するとともに、秋田民謡を県内外に広く発信しました。

⑪ 千葉・県民音楽祭　～世界に響け！みんなでつくるハーモニー～　世界を巡る音楽の旅 vol.3

- 実施主体：千葉県
- 事業概要：

  世代や障がいの有無に関わらず、様々な方が共にステージを作り上げる一般参加型コンサートです。アマチュア演奏家や地域で活動する団体を公募し、千葉交響楽団と共演しました。参加者は、オーケストラ演奏、合唱、ダンス、音楽活動を行う障がいのある方々によるステージのほか、プロのアーティストによるステージなど、多様な音楽を楽しみました。

⑫ 加賀百万石文化めぐり

- 実施主体：兼六園周辺文化の森等活性化推進実行委員会、いしかわの伝統文化活性化実行委員会
- 事業概要：

  藩政期から石川に息づく能楽と工芸のコラボレーションにより、伝統文化の魅力を複合的に発信しました。①能楽堂での刀剣をテーマにした能、②博物館での刀剣の大規模な展覧会、③美術館での能装束の展示等を中心とする、集積した文化施設群による文化プロジェクトです。

⑬ プレミアムよさこい in 東京　2020

- 実施主体：よさこいで応援プロジェクト実行委員会
- 事業概要：

  世界 33 の国や地域へ広がる日本を代表する祭り「よさこい」の、国内外の文化と融合した多彩な魅力を、LIVE 配信を通じて世界に発信しました。

  各地域を代表するチームの演舞や、視聴者参加型の総踊り等のプログラムを実施し、多くの皆様の視聴を通して、東京 2020 大会の開幕に向けてエールを送りました。

⑭ サイタマ de スポーツ＆下總皖一音楽賞受賞者コンサート 2021～埼玉から響く音楽のエール～

- 実施主体：埼玉県
- 事業概要：

  東京 2020 大会の競技開催県である埼玉県において、大会開催にあわせて、県の文化資源を生かし、大会の祝祭感も表現する展覧会及びコンサートを開催しました。県の文化芸術の魅力を国内外に発信するとともに一層の活性化を図りました。なお、開催に当たっては、障がい者や外国の方が観覧しやすいように配慮しました。

⑮ 東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会 安全祈願奉納流鏑馬

- 実施主体：公益社団法人大日本弓馬会
- 事業概要：

  世の中の平和や人々の幸せを祈って行う流鏑馬を、このたびは大会の安全な開催と成功を祈念して実施しました。会場では実況アナウンスとともに、流鏑馬の歴史や見所などを日本語と英語で解説しました。新型コロナウイルス感染症蔓延防止のため、無観客開催となりましたが、オンラインライブ配信を行うことで、自宅でも流鏑馬を見て、その魅力を理解できるような環境を提供しました。

⑯ 江戸東京の芸能 Discover Tokyo

- 実施主体：日本芸能実演家団体協議会
- 事業概要：

  東京 2020 大会を機に、夏休みの期間、伝統芸能を幅広い世代で親しんでもらい、その魅力を伝えるため、解説付き初心者向け公演とプロが丁寧に教える体験プログラム(日本舞踊･三味線･箏･落語)を実施しました。ボクシング会場（国技館）に隣接する江戸東京博物館の展示企画とも連携し、オリンピック開催期間中、日本の伝統文化を世界に、全国に発信しました。

⑰ TURN

- 実施主体：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京・東京都美術館、特定非営利活動法人 Art's Embrace、国立大学法人東京芸術大学、国立新美術館
- 事業概要：

障がいの有無、世代、性別、国籍、住環境等の背景や習慣の違いを超えた、多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクトです。国立新美術館での「TURN 茶会」では、「地球・人をアートで問う」をテーマに、互いに手を動かしながら、心持ちを交わし合う場を創出しました。また、東京都美術館と特設ウェブサイトで開催した「TURN フェス 6」では、「出会いが広がる」をテーマに、美術館での作品展示やワークショップ、映画上映、オンラインプログラムを通してアクセシビリティを体験していただくことで、TURN の取組や考え方を紹介しました。

⑱ 東京 2020 オリンピック・パラリンピック能楽祭

- 実施主体：公益社団法人能楽協会、一般社団法人日本能楽会
- 事業概要：

  能楽には、悠久の歴史を背景とした平和や多様性などの日本らしさ、伝えるべき日本人の心が詰まっています。国内外の多くの方々に向け、日本の魅力発信をテーマに、«日本文化の総合展示»としての能楽フェスティバルを開催しました。

⑲ 福岡和文化プロムナード　世界和太鼓フェスティバル

- 実施主体：福岡和文化プロムナード実行委員会
- 事業概要：

  障がいの有無、国籍等に関わらず、世界に広く普及している和太鼓の U-18、世界和太鼓フェスィバルを開催し、福岡から世界に向けて和文化を情報発信しました。

  同時に、福岡の文化団体が日舞、茶道、いけばななどの和文化を披露することにより、福岡において日本の和文化のすばらしさを体験していただきました。

⑳ インクルーシブ NIPPON　Shinagawa 発 2020 能・狂言特別公演

- 実施主体：品川区、社会福祉法人トット基金、公益財団法人十四世六平太記念財団
- 事業概要：

  能楽の分野でユニークな活動を続ける二つの団体の制作による能狂言特別公演です。障がいの有無、年齢や国籍に関わらずあらゆる人が出会い、共に楽しみ、新たな価値を発見する共生社会の実現に向け、日本が世界に誇る伝統演劇である能楽のインクルーシブな可能性をオリンピック競技開催地である品川区から世界へ向けて発信しました。

㉑ 日本の伝統芸能「能楽」と西洋の伝統文化「オペラ」の融合による文化芸術発信事業

- 実施主体：（主催）神奈川県、（共催）神奈川県立県民ホール・神奈川県立かながわアートホール、（後援）鎌倉市
- 事業概要：

神奈川県の伝統文化や歴史への関心を深め、文化芸術の多様性理解や国際間の相互理解を促進するため、神奈川県立県民ホールを会場として、日本の伝統芸能と西洋の伝統文化を融合させた公演を動画配信することで、神奈川県及び日本の魅力と文化の多様性の素晴らしさを国内外に向けて発信しました。

㉒「完全版マハーバーラタ～愛の章／嵐の章」

- 実施主体：（主催）完全版マハーバーラタ実行委員会、（共催）公益財団法人セゾン文化財団
- 事業概要：

インド古代叙事詩「マハーバーラタ」を全編舞台化し、上演しました。ふたつの部族による対立の物語を現代社会に重ね合わせつつ描き、「平和」「共生」のメッセージを発信しました。

㉓ 国立競技場の木のコカリナが奏でるコンサート～世界中の友達に平和を～

- 実施主体：特定非営利活動法人日本コカリナ協会
- 事業概要：

コカリナは木でできたオカリナです。日本の音楽家・木工家の手によって豊かな音色、幅広い音域を奏でられる楽器として進化しました。

このコンサートでは、オリンピック会場である国立競技場の建替えのために伐採された木からできたコカリナを子供たちと共に奏で、コロナ禍にいる世界中の子供たちが、一日も早く平和な世界を取り戻せるよう響かせました。

㉔ キャナルアートモーメント品川 2021～Art Empowerment～

- 実施主体：品川区、一般社団法人天王洲・キャナルサイド活性化協会
- 事業概要：

天王洲運河の水辺を先進的で斬新な会場空間として仕立て、運河上に係留した台船をステージ及び客席として活用し、対岸のビル壁面に投影するプロジェクションマッピング映像の演出とともに、日本の伝統芸能および文化芸能コンテンツを、オンラインライブ配信でご覧いただきました。

㉕ わらアートまつり 2021

- 実施主体：新潟市
- 事業概要：
  日本の食文化の中心であり、米どころ新潟を象徴する稲作農業の副産物である「稲わら」を材料にした「わらアート」作品を、東京の美術大学生が提供したデザインをもとに、現地で新潟のサポーターが制作・展示を行い、新潟市が誇る文化の魅力を国内外に発信しました。

㉖ 三陸国際芸術祭 2021　『髪長姫』　アジアが紡ぐ笛ものがたり

- 実施主体：三陸国際芸術推進委員会、国際交流基金アジアセンター
- 事業概要：三陸の民話「髪長姫」を題材に、インドネシア、カンボジア、三陸の民俗芸能団体が協働して創作した舞台作品を発表しました。国境を越えた人の移動が困難な状況の中、2021 年 5 月から各国をオンラインで繋ぎ、互いの旋律やアイディアを交換しながら新たな作品を生み出すという、これまでにない挑戦となりました。アジア諸国と三陸の継続的な交流を今後も模索していきます。

○　中止事業（6 プログラム）

No.	事業名	実施主体	実施場所
1	ふるさとの祭り 2021	福島県、ふるさとの祭り実行委員会	福島県
2	ヨーソロー1000 人プロジェクト～千葉から千の響き「和太鼓 1000 人打ち」	ヨーソロー1000 人プロジェクト実行委員会	千葉県
3	とくしま音楽祭 2021	徳島県	徳島県
4	親子のための組踊鑑賞教室「万歳敵討」	文化庁・独立行政法人日本芸術文化振興会、公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団	沖縄県
5	ツナガルアートフェスティバル FUKUOKA	ふくおか県民文化祭福岡県実行委員会	福岡県

6	東京キャラバン	東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京	東京都

４．教育

（１）　レガシーコンセプト

- 基本的な考え方を踏まえ、教育の分野では以下の通り、３つのレガシーコンセプトを設定し、全国の児童・生徒が東京 2020 大会をきっかけに、将来の国際社会やわが国を担う人材としての礎を固め、大会後の次代を担うのは自分自身であるという当事者意識を持てるようになることを目的として取組を推進しました。

  コンセプト①：オリンピック・パラリンピックやスポーツの価値の理解

  コンセプト②：多様性に関する理解～障がい者への理解・国際理解～

  コンセプト③：主体的・積極的な参画と大学連携

（２）　アクション

１）　東京 2020 組織委員会によるアクション

- 上記 3 つのレガシーの実現に向けて、児童・生徒の学びや参画の機会を創出するため様々な取組を実施しました。
- オリンピック・パラリンピック教育に取り組む学校の教育事業を、東京 2020 オリンピック・パラリンピック教育実施校（愛称「よういい、ドン！スクール」）として認証する「学校事業認証」を、2016 年 10 月から東京都等で、2017 年 4 月から全国で実施しました。
- オリンピック・パラリンピック教育に資する教材・教師用指導案・授業用参考資料等を東京 2020 教育プログラム特設サイト「TOKYO 2020 for KIDS」（以下「教育サイト」とします。）にて配布し、普及啓発に努めました。主な教材としては、IOC 公認教材「オリンピック価値教育の基礎（以下「OVEP」とします。）」、IPC 公認教材『I'mPOSSIBLE（アイムポッシブル）』日本版及び東京都教育委員会作成「オリンピック・パラリンピック学習読本」があり、全国の小学校から高等学校等において活用されました。また、東京 2020 マスコット、東京 2020 聖火リレーや学校連携観戦等、東京 2020 大会主要事業に関する理解促進のため、授業で活用できるスライド資料や教師用指導案等を作成・配布しました。
- 新型コロナウイルス感染症対策のため自宅学習が増えた状況に対応し、新しい学びの取組として、オリンピック・パラリンピックについて学ぶことができる動画や、興味・関心のある競技を調べ、ルール等を学びながら図鑑としてまとめることのできる学習コンテンツなど、調べ学習や家庭学習にも対応した教材等を作成、配布しました。
- 東京 2020 大会への参画機会の提供として、2018 年には 1 万 6,769 校の小学校等が参加した「東京 2020 マスコット小学生投票」が行われました。その他にも、東京 2020 マスコット又はアスリートによる学校訪問イベント、「東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向けたポスター募集企画」、「東京 2020 みんなのスポーツフェスティバル」や「東京 2020 高校生英語スピーチコンテスト」等の事業を企画・実施しました。また、競技を題材とした算数ドリルを作成・都内の全公立小学校に配布し、アスリートが学校を訪問し実践学習会を実施しました。
- 大会時の教育プログラムとしては、「学校連携観戦チケット」でオリンピック約 4,700 人（宮城県、茨城県、静岡県）／パラリンピック約 15,700 人（東京都、埼

玉県、千葉県）の児童・生徒等に観戦の機会を提供しました。また、競技運営支援やスポーツプレゼンテーション等により、多くの児童・生徒が大会運営に参加する機会を提供しました。

- 教育サイト及び認証校向けメールマガジン「よういー、ドン！通信」を運用し、教員や児童・生徒に対し、いつでも大会の最新情報が得られるようにするとともに、各々の関心に沿った教材や授業で活用できる素材等を無償でダウンロードできるようにしました。さらには、各学校における授業計画の参考となるよう、優れた取組事例を紹介するとともに、学校や児童・生徒が活用できるよう、東京 2020 組織委員会及びステークホルダーによる学校・教員向けプログラムの紹介を行いました。
- 大会で使用された競技用備品等を今後のオリンピック・パラリンピック教育で活用いただけるよう、全国の自治体等に提供しました。

2）　その他のステークホルダーによるアクション

- 国においては、オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業により、35 道府県・11 政令指定都市においてオリンピック・パラリンピック教育を推進しました。また、指導参考資料や実践事例集を作成し、全国の教育現場に提供しました。
- 東京都においては、2016 年度からすべての公立学校において、オリンピック・パラリンピック教育を実施し、特に「ボランティアマインド」「障害者理解」「スポーツ志向」「日本人としての自覚と誇り」「豊かな国際感覚」の 5 つの資質について、重点的に育成しました。

  各学校は、5 つの資質を伸ばすために、主に「東京ユースボランティア」「スマイルプロジェクト」「夢・未来プロジェクト」「世界ともだちプロジェクト」の 4 つのプロジェクトを活用するとともに、共生社会の実現に向けた特色ある教育活動を実施しました。
- その他のステークホルダーにおいても、3 つのレガシーの実現に繋がる多種多様なプログラムが全国各地で展開され、多数の児童・生徒に学びや参画の機会が提供されました。
  - JOC：OVEP の普及啓発、オリンピック教室の開催。また、2019 年 9 月にオープンした日本オリンピックミュージアムでは、オリンピックを「知る」、「学ぶ」、「感じる」、「挑戦する」、「考える」機会の創出を目指し、オリンピック・ムーブメントの発信拠点として、オリンピック・パラリンピックを通してスポーツの魅力や価値を多くの人に伝えています。
  - JPC：『I'mPOSSIBLE』の普及啓発
  - パートナー企業：オリンピック・パラリンピック関連展示、出張授業及び関連教材の提供等

（3）　主な実績・成果

- 日本全国でオリンピック・パラリンピック教育が実施されました。
  - 2017 及び 2018 年に改訂された学習指導要領において、オリンピックと同様

にパラリンピックが位置付けられ、より様々な教科で取り入れられることになりました。

- 「よういドン！スクール」は、全 47 都道府県及び海外の日本人学校等で合計 1 万 9,005 校に上りました。特に小学校においては、総数の約 7 割の学校が「よういドン！スクール」として認定されました。
- オリンピック・パラリンピック教材や関連資料が全国で広く活用されました。また、教員向けのオリンピック・パラリンピック教育に関する研修が全国で実施されました。
- 大会数年前からオリンピック･パラリンピック教育を推進してきたことにより、オリンピック・パラリンピック教育実施校においては、児童・生徒のオリンピック・パラリンピックに対する興味関心、ボランティア、イベントの参加への興味関心に加え、社会参加や運動やスポーツへの興味、日本及び海外の文化や暮らしといったテーマ全てについて、児童生徒の態度が肯定的に変化したことが、これまでの調査を通じた結果として見られました。
- 他の学校の取組の参考となるよう、学校から寄せられたレポート等をもとに、様々な取組事例や児童・生徒からの感想等を教育サイトで紹介しました。

・ 多くの児童・生徒に様々な種類の参画の機会を提供することができました。

- 東京 2020 組織委員会主催の学校訪問イベントや公開授業等を全国で実施しました。また、学校又は児童・生徒が参加できるプログラムを企画・実施し、国内外から多くの参画がありました。

（4） レガシー

1） オリンピック・パラリンピック教育の実施基盤の構築

・ オリンピック・パラリンピック教育の日本全国への普及のため、国・教育委員会・大学・JOC・JPC・東京 2020 組織委員会等の関係団体が一体となってオリンピック･パラリンピック教育に係る情報共有やノウハウの継承を効率的かつ活発に行う関係者間のネットワークが構築されました。大会を通じて得られたこのネットワークを後世に継承していきます。

・ 東京 2020 大会に向けて、国・教育委員会・大学・JOC・JPC・東京 2020 組織委員会等により、オリンピック・パラリンピック教育に資する教材・資料が多数制作され、活用されました。大会後も引き続き学校においてオリンピック・パラリンピック教育として取り組んだ内容をレガシーとして継続していくことが期待されます。

2） 児童･生徒における心のレガシーの創出（「自信と勇気」「多様性の理解」「主体的・積極的な社会参画」）

・ 東京 2020 教育プログラムを実施しオリンピック･パラリンピック教育の普及啓発に取り組んだことで、大会は、児童・生徒が、世界中から集まったアスリートが自己の限界に挑んでいる様子等を間近に感じ、オリンピックの価値及びパラリンピックの価値を学ぶ機会となりました。また、取り組んだことのない競技の体験、障が

いの有無に関わらず活躍している様々なアスリート等との交流、大会準備・運営への主体的な参画など、児童・生徒に対して様々なタイプの挑戦の機会を提供しました。これらの取組により、児童・生徒の心に「自信と勇気」「多様性の理解」「主体的・積極的な社会参画」というレガシーを残すことができました。

- 特にパラリンピック教育においては、子供たちが学んだことを周囲の大人たちに伝える「リバースエデュケーション」効果が期待されます。東京 2020 教育プログラムを通して誰もが個性や能力を発揮し活躍できることを学んだ子供たちの経験・意識の変化が周囲に波及することによって、共生社会を育む契機に繋がっていきます。

（5） 事例紹介

＜「OVEP」の活用促進＞

- 事業概要

  「OVEP」は、IOC により開発された教材であり、オリンピックの 5 つの教育的価値（「努力から得られる喜び」、「フェアプレー」、「他者への敬意」、「卓越性の追求」、「肉体、意思、精神のバランス」）を柱としています。

  日本語版は、JOC が筑波大学及び日本オリンピックアカデミーの監修により翻訳しました。また、「OVEP」を日本の授業で活用するための教師用指導案を、筑波大学の監修により作成しました。

- 主な実績
  - ➢ 東京 2020 教育プログラム特設サイト「TOKYO 2020 for KIDS」に「OVEP」、教師用指導案及び児童・生徒用ワークシートをダウンロード可能な形式で掲載し、2018 年 2 月からの約 3 年半で累計 2 万 3061 件のダウンロードがありました。
  - ➢ 教材の活用促進のため、筑波大学の協力によりワークショップや公開授業を実施しました。

- レガシー
  - ➢ 「OVEP」を活用した授業に参加したことで、子供たちは単なるスポーツ大会にとどまらないオリンピックの価値を学びました。これにより、スポーツにおけるチャレンジ精神やフェアプレー精神の重要性の理解に繋がりました。

<「I'mPOSSIBLE（アイムポッシブル）」の活用促進>

- 事業概要

  「I'mPOSSIBLE」は世界中の子供たちにパラリンピックの価値とパラリンピック・ムーブメントのビジョンを普及することを目的として、IPC の関係機関であるアギトス財団が開発した教材です。

  日本版教材は、国際版教材の内容をもとに、日本財団パラリンピックサポートセンターと JPC が公益財団法人ベネッセこども基金と共同開発しました。

- 主な実績

  ➢ 日本全国約 3 万 6,000 の小・中・高及び特別支援学校に『I'mPOSSIBLE』日本版の教材キット（印刷物・DVD・教師用指導案・教師用授業ガイド）を送付しました。また、東京 2020 教育プログラム特設サイト「TOKYO 2020 for KIDS」に、各教材をダウンロード可能な形式で掲載し、2017 年 7 月からの約 4 年間で累計 13 万 3,857 件のダウンロードがありました。

  ➢ 教材の活用促進のため、日本財団パラリンピックサポートセンターによる教員研修を実施しました。教員研修会や校長会等、教育関係者が集まる場を訪問し、教員等に教材の紹介やパラリンピック教育の意義の説明、実技研修を行いました。

- レガシー

  ➢ 『I'mPOSSIBLE』日本版を活用した授業に参加したことで、子供たちはちょっとした工夫により、障がいの有無に関わらず皆で楽しむことができるという『I'mPOSSIBLE』の精神を学びました。これにより、子供たちのパラリンピックやパラリンピアン、障がいのある人々に対する意識の変革がみられたほか、相手の視点に立って物事を考えることの重要性にも気づいてもらうことができました。

  ➢ 実技研修を含む教員研修の実施により、パラリンピックやパラリンピック競技を教えることができる教員が日本全国に誕生しました。これにより、東京 2020 大会以降も、日本全国でパラリンピック教育の着実な継続が期待できます。

<「オリンピック・パラリンピック学習読本」活用促進>

- 事業概要

  「オリンピック・パラリンピック学習読本」は、子供たちがオリンピック・パラリンピックの精神、スポーツ、文化、環境等、オリンピック・パラリンピックに関する基礎的な内容を学び、正しく理解してもらうことを目的として、東京都教育委員会が作成したものです。小学校編・中学校編・高等学校編と各年代に合わせた内容となっています。

- 主な実績

  都内の小・中・高及び特別支援学校に「オリンピック・パラリンピック学習読本」を送付しました。また、東京2020教育プログラム特設サイト「TOKYO 2020 for KIDS」に各教材をダウンロード可能な形式で掲載し、2017年9月からの約4年間で累計4万7,315件のダウンロードがありました。

- レガシー

  「オリンピック・パラリンピック学習読本」を活用した学びにより、将来を担う子供たちにオリンピック・パラリンピックの精神等を理解してもらうことができました。これにより、次の世代にもオリンピック・パラリンピックの精神等が引き継がれていきます。

<東京2020マスコット小学生投票>

- 事業概要

  東京2020マスコットを、過去大会にはなかった史上初の試みとして、小学生による投票で選定しました。児童は、オリンピック・パラリンピックの理念、マスコットの役割、最終候補3作品のコンセプト及び海外に伝えるべき日本文化等について学び、考え、学級内で議論した上で、1学級1票の投票先を決定しました。

- 主な実績

  - 対象校の約8割となる国内外1万6,769校の20万5,755学級が投票に参加しました。また、全国233の自治体が「マスコット投票宣言」を行い、域内の小学校のマスコット投票を支援しました。
  - 投票前の事前授業の促進のため、マスコットに関する指導案や授業用参考資料を作成・配布しました。また、最終候補3作品の紹介ビデオや立体のマスコットを配布することで、障がいの有無に関わらず、誰もが投票に参加できるようにしました。
  - 東京2020マスコットの決定後、投票の御礼として、投票の順番が2020の倍数であった8校に対して、東京2020マスコット学校訪問を実施しました。また、東京2020マスコットイラストの教育現場での活用促進を図

ったこと等により、子供たちに選ばれた子供たちのためのマスコットとして愛されました。

- レガシー
  - 投票にあたって、子供たちがオリンピック・パラリンピックの意義やマスコットの役割、日本の文化等について学ぶことを通じ、オリンピック・パラリンピックへ興味関心を持つきっかけに繋げることができました。
  - 子供たち自身の投票結果を東京 2020 マスコットの選定に反映したことにより、東京 2020 マスコットへの興味関心や東京 2020 大会への参画意識の向上に加え、重要な社会参画を果たしたという心のレガシーを残すことができました。

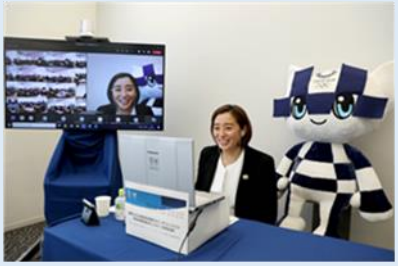
<東京 2020 高校生英語スピーチコンテスト>

- 事業概要
  - 若者世代における「平和の祭典」としてのオリンピックの価値の普及促進のため、高校生を対象として英語スピーチコンテストを実施しました。個人賞は「平和な世界に向けてスポーツの果たす役割」を題材とした、3～5分間のスピーチを、学校賞は本テーマに関する学校での優れた取組事例を募集しました。
- 主な実績
  - 個人賞には全国から 168 名の応募ありました。一次審査を通過した 10 名の高校生が、JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE において開催された最終審査会でスピーチを行い、受賞者 4 名が決定、表彰を受けました。
  - 最優秀賞受賞者は、2021 年 7 月 19 日に選手村ビレッジプラザにおいて実施された「オリンピック休戦ムラール（※）署名式」において、コロナウイルス対策に鑑みビデオメッセージの形で、スピーチを披露しました。学校賞受賞校では、アスリートによるオンラインでの交流会を開催しました。
  - 事前学習の促進のため、オリンピック休戦についての指導案や動画等を作成、教育サイトにおいて配布しました。また、コンテスト実施前には、オリンピアンによる「スポーツと平和」についての講演会を都内の高校で開催しました。この講演会の模様は、他の教材とともに教育サイトに動画を

掲載し、全国の学校で活用されました。

- レガシー
  - ➢ コンテスト実施によって、生徒が「平和の祭典」としてのオリンピックの価値と意義を学び、スポーツを通じた融和や平和への理解等について自ら考える機会となりました。
  - ➢ 休戦ムラール署名式の場から国際社会へ、若者からオリンピックやスポーツを通じた平和の実現についてのメッセージが力強く発信されました。

    ※「オリンピック休戦ムラール」は、大会に参加する選手等にオリンピック休戦への賛同を呼びかけ、平和への祈りを込めて署名してもらうため、選手村ビレッジプラザに設置されました。



＜学校連携観戦＞

- 事業概要

  次世代を担うより多くの子供たちに、一生の財産として心に残るような観戦の機会を提供するため、自治体や学校単位でチケットを低廉な価格で購入できる「学校連携観戦チケット」を企画しました。観戦にあたっては、子供たちの観戦体験がより印象的かつ効果的なものとなるよう、事前・事後学習用の教師用指導案及び児童・生徒用観戦ワークシートを作成し、教育サイトで無償配布しました（監修：国立大学法人筑波大学）。

- 主な実績

  オリンピック約 4,700 人（宮城県、茨城県、静岡県）／パラリンピック約 15,700 人（東京都、埼玉県、千葉県）の児童・生徒等が競技会場で観戦しました。

  観戦した子供たちからは、「現地で見る迫力に圧倒された」、「障害を乗り越えた姿を尊敬する」や「心の中でしっかり『レガシー』として残る経験となった」といった声が聞かれました。

  学習に資するよう配布してきた教材等についても、最終的に、教育サイトから約 36 万回ダウンロードされ活用されました。

- レガシー
  - ➢ 観戦に当たっては、競技のルール、観戦マナー、参加国及びアスリート等についての事前学習を実施した学校が多くみられ、大会競技やスポーツへの興味関心の向上及び多様性の理解に繋げることができました。

＜大会時の教育プログラム＞

- 事業概要

  東京 2020 大会運営等への参加の機会を創出しました。高校生がそれぞれの個性を発揮できるように、競技運営の支援、スポーツプレゼンテーションにおけるパフォーマンス等の多様な機会を提供しました。

- 主な実績

  ➢ 競技運営サポート

  競技運営の支援においては、部活動等で当該競技の経験がある高校生約 1500 人がボールパーソンやモッパーといった、トップアスリートの間近での活動を行い、貴重な経験をしました。

  ➢ スポーツプレゼンテーション

  スポーツプレゼンテーションでは、64 団体の中高生・大学生のパフォーマーが、セッションの合間にダンスやマーチングバンド、ダブルダッチ（縄跳び）等を披露して、アスリートを勇気づけました。

  ➢ 東京 2020 みんなのエスコートキッズプロジェクト

  東京都への緊急事態宣言の発令等を受け、７月に急遽断念しましたが、参加する予定であった子供たちには当日着用を予定していたユニフォーム等を記念品として送付しました。アスリートから子供たちに向けたメッセージ動画も配信されました。

  ➢ フラワーレーンプロジェクト

  東京都・会場所在自治体の小学校及び特別支援学校約 300 校の子供たちが育てた約 33,000 鉢のアサガオ等（子供たちからの応援メッセージつき）が競技会場等で、アスリートや大会関係者をお出迎えしました。

  ➢ パラリンピック陸上競技備品「こん棒」の制作

  パラリンピック陸上競技種目「こん棒投」で使用された「こん棒」の一部を都内の工業高校の生徒が製作しました。使用されて世界新記録が出た「こん棒」については、大会後に当該学校へ寄贈しました。

- レガシー
  - ➢ 東京 2020 大会運営等に参加し、普段の活動の成果を発表したり、自らの個性を生かした活動を行ったりしたことで、子供たちの自信と勇気を引き出すきっかけとなりました。

（6） 大学連携

1） 大学連携の開始

- レガシーコンセプト③を、より具体的に実践していくため、2014 年より、全国の大学・短期大学と連携協定の締結を開始しました。
- 「オリンピック・アジェンダ 2020」に提言される"Engage with youth（若者と交流すること）"の実現を目指し、「教育」「経験」「レガシー」の 3 つのキーワードをもとに、様々なプログラムや、機運醸成に取り組みました。

2） 出張講座プログラム

- オリンピック・パラリンピック教育を推進していくため、大会の歴史や意義、東京 2020 大会に関した授業や講座を開講しました。
- 本プログラムでは、大会を経験した者、大会に従事してきた者、大会の準備・運営に携わる者から、直接話を聞くことのできる貴重な機会として、全国で実施されました。
  - ➢ テーマは 200 以上、受講者は計 2 万 6,000 人を超えました。
  - ➢ 大会パートナーの協力のもと、特別企画 出張講座プログラム Special も実施されました（計 3 回）。

3） アクション

- 2014 年～2015 年にかけて、全国 13 校の連携大学にて、「地域巡回フォーラム」を開催しました。このフォーラムでは、学生と多くの意見交換が行われました。
- また、リオ 2016 大会が開催された 2016 年には、出場した学生アスリートや、現地でボランティアを体験した学生を迎え、「学生のための Rio to Tokyo」を実施し

ました。

- 2017 年より、機運醸成イベント「Tokyo2020 学園祭」を立ち上げました。若者たちにとって、オリンピック・パラリンピックがより身近なものとなり、東京 2020 大会への参画に繋がりました。
  - 2017 年「Tokyo 2020 学園祭」、2018 年「Tokyo 2020 学園祭 the 2nd」、2019 年「Tokyo2020 学園祭 Next」、2020 年「Tokyo2020 学園祭 online」の計 4 回を実施しました。
- 各地での盛り上がりは、やがてムーブメントとなり、次第に、学生や連携大学主体による独自の活動へと繋がっていきました。このような活動の多くは、東京 2020 参画プログラムとしても実施されました。

4） 大会時のプログラム

- 2018 年には、大会ボランティアの募集開始に先立ち、全国 11 ヵ所 13 の連携大学で、説明会を開催しました。多くの若者が大会ボランティアへ応募し、若者のボランティア文化の醸成に寄与しました。
- 大会期間中には、大学連携独自の取組として「大学連携　情報保障プログラム」を実施しました。延べ 97 名の学生が参加し、バドミントン、アーチェリー、卓球、馬術（すべてオリンピック）の 4 競技、51 セッションにおいて、視覚・聴覚障がい者や日本語を母国語としない方の競技観戦のサポートを行いました。

5） レガシー

- 東京 2020 大会終了時には、締結校は 810 校となりました。
- このような形で、これほど多くの大学・短期大学が、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントに関わり、若者が大会への参画や協力に取り組んだことは、過去のオリンピック・パラリンピックを通じて、東京大会が初の試みでした。
- 大学連携は、未来の社会をつくる若者たちにとっての実践の場となり、自由な発想による思考と行動を支えました。